# ソ連共産党指導部が
# インドと連合して
# 中国に反対している真相

1963-11-2

外文出版社
北京

# ソ連共産党指導部がインドと連合して中国に反対している真相

『人民日報』編集部

外文出版社
北京

# 目次

ソ連共産党指導部がインドと連合して中国に反対している真相……『人民日報』編集部……五
（一九六三年十一月二日）

付録

アジアにおける緊張情勢の重大な策源地……四九
（一九六三年九月十九日付ソ連『プラウダ』紙掲載）

# ソ連共産党指導部がインドと連合して中国に反対している真相

『人民日報』編集部

（一九六三年十一月二日）

九月十九日、ソ連の『プラウダ』紙は、中印境界問題について、編集部署名の論文を発表した。この論文は「アジアにおける緊張情勢の重大な策源地」と題されている。本紙は九月二十五日にその全文を掲載した。この論文は事実を無視し、黒を白といいくるめ、中国は戦争手段に訴えて中印境界問題を解決しようとたくらんでいると中傷し、中印境界問題を平和的に解決する誠意がないと誹謗している。この論文は、中国とアジア、アフリカ諸国の関係をつとめて離間しようとし、中国はインドのように「コロンボ提案に積極的にこたえ、完全に、なんら留保するところなく、これらの提案を受けいれ」なかったと非難している。この論文はまた、世界の動乱をひたすら望み、中印辺境での衝突は「ふたたび先鋭なかたちをとる」であろうとおどし文句をいっている。

この論文が発表されると、たちまちインド反動派とアメリカ帝国主義の喝采をあびた。

ネールは九月二十一日にこう語った。『プラウダ』紙の論文は「インドの立場にたいするソ連の考え方が重要な意味をもつ発展をとげた」ことをしめしている、と。

インド情報局は、まるで至宝でも得たかのようによろこび、自分の流すニュースを聴取しているインドのあらゆる部門にこの論文全部を「最大限に」宣伝するよう通達した。

インドの反動的な新聞と出版物は、「ソ連は、インドが中国に反対することを全面的に支持している」、「今日、ソ連はその『兄弟的な』沈黙の態度をすてて、中印境界紛争で公然とインドの側に立った」と大声でわめきたてている。

アメリカの『クリスチャン・サイエンス・モニター』紙もつぎのように報道している。ソ連は、中国封じ込めの面で、いま「積極的な役割を果たし」つつある。このことは「西側に大きく息をぬいてもいいという理由を与えたのであり、これこそ西側がせつに必要とするものであった」と。同紙はまた、多くのインド人は『プラウダ』紙の論文を「近くおこなわれるはずの親西欧側の空軍演習とくらべうる抑止力だとみなしている」とのべた。

『プラウダ』紙の論文は、疑いもなくひじょうに重要な文章である。ソ連の指導者がインド反動派と連合して社会主義の中国に反対していることは、由来久しいものである。この論文は、ソ連の指導者が中立を装いながら、実際にはインド反動派に荷担していた状態からアメリカ帝国主義と連合して、インド反動派を公然と支持する状態に発展したことを示す道標である。



## （一）

中印境界問題は、われわれの意見とソ連指導者の意見とのあいだに存在する重要な原則的相違の一つである。この問題について、われわれはもともと中ソ間にある意見の相違の由来と発展にふれるつもりがなかった。現在、ソ連の指導者がそれを暴露し、しかも九月二十一日に発表した政府声明のなかで、一九五九年いらい中印境界問題でのかれらの立場は一貫して正しく、これに反して中国はまちがっていると断言したからには、是と非とをはっきりさせるため、ここ数年らいこの問題でわれわれとソ連指導者との意見の相違がどのように発展してきたかを見る必要がある。

(1) インド反動派はチベットの上層反動グループの武力反乱を策動し、支持することに失敗したのち、一九五九年八月二十五日、第一回目の中印辺境での武力衝突を引きおこした。一九五九年九月六日、中国の指導者は、このときの衝突の真相と衝突をできるだけ避けるという中国側の方針をソ連代理大使に説明した。そのとき中国の指導者はまたつぎのことをも指摘した。イン

ド政府が辺境での衝突を引きおこしたのは反共・反中国を目的としたものである。国内における階級闘争の激化にともない、ブルジョアジーがいっそう反動化するのは法則に合致していることである。ネールはソ連を利用して中国に圧力を加えようとやっきになっているが、これにだまされてはならない、と。

(2) 一九五九年九月九日午前、ソ連政府は九月十日に中印境界問題についてタス通信の声明を発表するつもりだと、ソ連代理大使が中国政府に通知し、その声明の原稿を渡した。中国政府はただちに、この問題でソ連政府が公然と態度を示さない方がもっとも望ましいと原則的な意思表示をした。

同日午後、中国政府は、九月八日ネール首相に送った周恩来総理の書簡の写しをソ連代理大使に交付した。中国政府はこの書簡のなかで、話し合いを通じて境界問題を友好的に解決し、解決をみるまでは境界の現状を維持するということをインド政府に提案しているのである。

同日夜、中国政府は、ソ連代理大使につぎのように知らせた。中国側はネールあての周恩来総理の書簡をすでに発表したから、ソ連政府はこの書簡のなかに示された中国政府の態度と立場を考慮して、タス通信の声明を発表しないよう希望する、と。

(3) 一九五九年九月九日夜、ソ連政府は中国の勧告をかえりみず、タス通信の声明をくりあげて発表し、中ソ両国間の意見の相違を公然と暴露した。この声明のなかで、ソ連政府は事の是非をとわず、中印辺境での衝突事件に漠然と「遺憾」の意をあらわし、表面上では中立を保ち、実際上ではインド側に荷担し、中国を非難した。

(4) 一九五九年九月三十日、フルシチョフ同志は「武力を用いて資本主義制度の安定性をためしてみる」べきではないと、中国を公然と非難した。全世界の人びとが知っているとおり、これは台湾問題と中印境界問題で中国が「好戦的」だと非難したものにほかならない。

(5) 一九五九年十月二日、中国の指導者はフルシチョフ同志に面と向かって、中印辺境での衝突の真相とその背景を説明した。そのなかで、これはインド側が越境、挑発したものであり、インド反動派にたいしてひたすら譲歩をこととするという態度をとってはいけないと指摘した。しかし、フルシチョフは境界問題の真相を理解しようともせず、まただれが挑発者であるかを理解しようともせず、いずれにしても人を殺すことは間違っているといちずに言い張ったのである。

(6) 一九五九年十月二十一日、インド反動派は中印辺境で、第二回目の武力衝突を引きおこした。十月二十六日、中国政府はこの事件の経過をソ連代理大使に通告した。

(7) 一九五九年十月三十一日、ソ連最高ソビエト会議で、フルシチョフは、中印辺境での衝突

事件にたいしいま一度「遺憾」と「傷心」を表明し、事件を挑発したインドの責任を抹殺した。

(8) 一九五九年十一月七日、インド週刊誌『ニュー・エイジ』記者との談話で、フルシチョフは一歩進んで、中印辺境事件は「悲しむべきこと」であり、「愚かなこと」であるとのべた。かれは、ソ連がイランと境界問題を解決したことを例にひき、「ソ連のような国にとって、数キロぐらいはものの数ではない」とのべ、中国が自己の領土を放棄して、インドの要求を満足させるべきだと暗示した。

(9) 一九五九年十二月十日から一九六〇年一月三十日までのあいだに、中国の指導者はソ連大使と六回にわたって談話をおこなった。そのつど、中国の指導者はつぎのことを指摘した。ソ連の指導者が中印境界問題について「中立を厳守する」のは間違っている。かれらの言論は、事実上中立どころではなく、逆にインドに荷担して、中国を非難しているものである、と。

(10) 一九六〇年二月六日、中国共産党中央委員会への口頭通知のなかで、ソ連共産党中央委員会は、つぎのようにのべた。「インドのように軍事、経済面で中国よりはるかに弱い国が、ほんとうに中国に軍事的攻撃を加え中国を侵略しようとしていると考えるのは、まったく厳粛さをかくものである」。また、中国のやり方は「狭あいな民族主義的態度の現われである」。「N・S・フルシチョフの訪米直前に、中印辺境で銃声が鳴りひびいたのは、ソ連の平和愛好の行動に



たいし困難を増加させたものであると全世界の人びとは考えている」、と。

(11) 一九六〇年六月二十二日、ブカレスト会談の期間中、フルシチョフは中国共産党代表団団長に、「わたくしはなにが戦争であるかということを心得ている。インドで死人がでた以上、これは中国がインドを攻撃したということになる」といった。かれはさらに、「われわれは共産主義者である。どこに国境線を引くかといったことはわれわれにとって主要な問題ではない」と語った。

(12) 一九六二年十月八日、中国の指導者はソ連大使にたいし、インドが中印辺境で大規模な攻撃を開始しようとしていることをわれわれは知っている、もしインドがいったん攻撃を開始すれば、われわれはだんことして自衛行動にでるであろうと通告した。中国の指導者は、同時につぎのことを指摘した。インドがソ連製のヘリコプターと輸送機を利用して、中印辺境地区に空中投下、軍需品輸送をおこなうことは、わが国の辺境守備隊兵士に影響をおよぼすものであり、われわれがこの状況をソ連側に通知するのはわれわれの国際主義的義務であると考える、と。

(13) 一九六二年十月十三日と十四日、フルシチョフは中国大使につぎのことを表明した。インドが中国に攻撃を開始しようとしている問題について、ソ連が入手した情報は中国の情報と一致している。ソ連が中国の立場に立たされた場合、おそらく同様の措置をとるであろう。中印境

界問題で中立的態度をとることは不可能である。もし誰かが中国を攻撃したとき、われわれは中立であるというならば、それは裏切り行為にほかならない、と。

(14) 一九六二年十月二十日、インド反動派は中国に大規模な武力攻撃を開始した。十月二十五日、ソ連の『プラウダ』紙は社説を発表して、悪名高いマクマホン・ラインは中国人民とインド人民におしつけられたものであり、このラインはいまだかつて中国から承認されたことがなかったものである、と指摘した。同紙はまた、中国政府が十月二十四日づけの声明で提出した三項目の提案は建設的なものであり、中印双方が話し合いを開始し、平和的に紛争を解決しようとするにあたり、受けいれることのできる基礎となるものである、といった。

(15) 一九六二年十二月十二日、フルシチョフはまだ二ヵ月にもならないまえに自分がいったことをいっさい忘れさり、またもとの口調に立ちかえって、ソ連最高ソビエト会議で、つぎのことを意味ありげにのべたてた。中印双方が紛争をおこしている地区は、人家のまれなところで、人間の生活にあまり大きな価値をもっているとは思われない。われわれは、インドが中国と戦争しようとはぜんぜん考えていない。境界紛争の問題について、われわれはレーニンの観点を遵守する。ソ連の四十五年らいの経験が証明しているように、武力に訴えなければ解決できないというような境界紛争はありえない。中国が一方的に停戦し、後退したのは、もちろんよいことで



ある。しかし、当時、中国軍隊がもとの陣地から前進しなかったなら、もっとよいことではなかったか、と。

(16) 一九六三年九月十九日、ソ連の指導者は『プラウダ』紙編集部署名の論文を発表することにより、いっさいの偽装をかなぐりすて、公然とアメリカ帝国主義の側に立ち、インド反動派を支持して、社会主義の中国に反対した。

上述した歴史的事実からつぎのことをはっきりとみてとることができる。中印境界問題のうえで中ソ間にあらわれた意見の相違をとりのぞくため、中国側は精いっぱいの努力をかたむけた。しかし、ソ連共産党指導部は大国排外主義の態度を固持し、がんとしていっさいの道理を無視し、中国の意見をただのひとことも聞きいれなかった。いわゆるキャンプ・デービッド精神をつくりだすため、かれらはアメリカ帝国主義への贈り物として、中ソ間の意見の相違を公然と暴露した。カリブ海の危機にさいして、かれらは実用主義的打算から、表面上は公平にみえることを二と三といったこともあるが、時機がいったん過ぎさると、ただちに自分の口からでたことをすべて否認した。かれらは終始インド反動派の側に立って、中国に反対してきた。これらの事実がしめしているように、中印境界問題でのソ連共産党指導部の立場はプロレタリア国際主義の原則にたいする完全な裏切りである。

## （二）

ここ四年らい、中印境界問題で、われわれとソ連の指導者とのあいだにおこった意見の相違は、おもにつぎの四つの問題にしぼられる。

第一、中印境界問題は一つの重大な原則問題であるのか、それともとるにたらない小さな問題であるのか。

第二、だれが境界の現状をだんこ維持したのか、だれが辺境で武力衝突をひきおこしたのか。

第三、社会主義国はブルジョア反動派の武力攻撃にたいしてどんな態度をとるべきか。

第四、中印境界問題を平和的に解決する誠意がないのはだれか、それはインドなのか、それとも中国なのか。

この四つの問題で、ソ連の指導者はどのように下心を持って事実を抹殺し、是非を転倒し、インドを支持し、中国を裏切ったかを見ようではないか。

### 一、中印境界問題は一つの重大な原則問題であるのか？　それともとるにたらない小さな問題であるのか？

中印境界問題が一二万五〇〇〇平方キロにおよぶ中国領土にかかわるものであることは、全世界の人びとがあまねく知っているところである。これは大きな問題であり、小さな問題ではない。われわれは従来より、たとえこのように大きな問題であっても、双方が平等な態度でのぞみ、互いに諒解し、譲りあう精神をもつならば、解決することができるものと見なしてきた。ところが、インド政府は中印境界の東部区間で不法なマクマホン・ライン以南にある九万平方キロにおよぶ中国領土を侵略、占領したばかりでなく、中印境界中部区間で二〇〇〇平方キロの中国領土を侵略、占領し、そのうえ強引にも中印境界西部区間のもともと中国の管轄下にあった三万三〇〇〇平方キロにおよぶ中国領土を一歩一歩侵略、占領しようとした。これがガンとなって、中印境界問題は長期にわたって解決できなかったのである。

ところが、ソ連の指導者はこの問題をとるにたらない小さな問題であるといっている。

フルシチョフは「数キロぐらいはものの数ではない」といっている。

われわれはこうしたいい方に同意できない。これは数キロの問題ではなく、一二万五〇〇〇平方キロの問題である。一二万五〇〇〇平方キロとはどれだけの大きさに相当するか。それはソ連のアゼルバイジャン、アルメニア両共和国の面積の総和よりさらに大きいのである。もしある資本主義国が、強引にソ連のこの二つの共和国を侵略、占領しようとした場合、ソ連の指導者はやはりとるにたらない小さな問題とし、口にするほどのことでもないと見なすであろうか。

フルシチョフはまた、中印辺境紛争地帯は人家のまれなところであり、人間の生活にあまり大きな価値はない、それゆえ真剣に対処するに値しないとのべている。

われわれはこうしたいい方にも同意できない。社会主義国は人口の密集した領土を守ることだけが許され、人家のまれな領土は守るべきではないと、だれが規定したというのか。中印境界東部区間一帯の人口密度はソ連のトルクメン共和国とたいした変わりはない。中印境界西部区間一帯も、アメリカのアラスカから海をこえてのぞむことのできるソ連東北部の広大なツンドラ地帯より荒れすさんでいるとは決していえない。もしある資本主義国が、強引にソ連のこれらの地域を占有しようとした場合でも、ソ連の指導者はささいなことをとやかくいう必要はないとし、手をこまねいてそれを譲り渡すことができるであろうか。

また、共産主義者にとっては国境線をどこに引こうとかまわないではないかと、かれらはいっている。

もちろん、こうした言葉はまったく聞こえのよいものである。ところが残念なことには、階級と国家が存在し、帝国主義とブルジョア反動派が存在している世界にわれわれが生活していることをかれらは忘れているのである。こうした論法によると、社会主義国は自国の境界を守る権利がまったくないことになるではないか。それなら、ドイツとポーランド間のオーデル・ナイセ河境界の不可侵性を社会主義諸国が一致して堅持していることは、いったい何の意味があるのか。こうしたでたらめな言論は、明らかにソ連人民と社会主義諸国人民にとって許すことのできないものである。



## 二、だれが境界の現状をだんこ維持したのか？　だれが辺境で武力衝突をひきおこしたのか？

この問題もまた、はっきりしている。

インドがすでに九万平方キロ以上の中国領土を侵略、占領したにもかかわらず、中国は依然として話し合いを通じて平和的に境界問題を解決するよう一貫して主張している。そして解決をみるまでは、境界の現状を維持し、衝突の発生をさけることを主張している。

インド反動派は話し合いを通じて平和的に境界問題を解決することをのぞまぬばかりでなく、客観的に存在している境界の現状を維持することをも欲していない。そして三万平方キロ以上におよぶ別の中国領土を侵略、占領する野心を実現するために、武力の行使をも惜しまず、一度ならず境界の現状を破壊し、武力衝突さえひきおこしたのである。

中印双方が境界問題でとったこの二つのまったく相反した立場は、事実を尊重し、偏見をもた

ない人にとっては、きわめてはっきりしたことである。

境界の現状を維持し、辺境の安寧を確保し、話し合いによって境界問題をなんとか解決しようとし、中国はうまずたゆまず努力を重ねてきたのである。

中国は不法なマクマホン・ラインを承認しない。しかし、こ二十数年らい、このラインを越えるようなことはけっしてしなかった。

インド側がひきつづき二回にわたって辺境で衝突をひきおこしたのち、一九五九年十一月七日、中国は、双方の武装部隊が実際支配線からそれぞれ二〇キロ後退するとともに、巡らを停止することを提案した。インド側はこれらの提案を拒否したが、中国はやはり一方的に巡らを停止したのである。

一九六〇年四月、中国総理は、当時インド反動派がまきおこした反中国キャンペーンを意にかいせず、みずからニューデリーを訪れ、インド首相と会談をおこなったのである。しかし、インド側は平和的に境界問題を解決することも望まず、また境界の現状を維持することも望まなかったのである。

一九六一年、とりわけ一九六二年、インド側は中国の一方的巡ら停止のすきに乗じて、一歩一歩前へ進み、ますます多くの中国領土を侵略、占領し、ますますはげしい武力挑発をしかけてきたのである。中国はきわめて大きな忍耐と自制をつづけ、そのうえ一九六二年八月から十月までの三ヵ月間に、連続三回にわたって境界問題について話し合いをおこなうよう提案したが、三回ともインド側に拒否されたのである。

一九六二年十月十二日、ネールは中国軍隊を中国の領土から「一掃する」よう命令を下したと声明した。一九六二年十月二十日、インド軍隊は大規模な全面的攻撃を開始した。中国はこれ以上たえ忍ぶことができなくなり、これ以上退くことができなくなってはじめて、自衛のための反撃行動にでたのである。しかし、情勢を転換させるために中国は、時を移さず、十月二十四日、衝突の停止、話し合いの再開、境界問題の平和的解決という三項目の提案をおこなった。これらの提案がインド側に拒否されたのち、中国はまた主動的に停戦、後退など一連の重要な和解の措置をとったのである。

こ二数年らいの事実によって、境界の現状をだんこ維持しているのは中国であり、武力で境界の現状を変えようとつとめているのはインドであることがわかる。いままで、いく度か平和的な提案をしたのはことごとく中国である。いままで、いく度か武力衝突をひきおこしたのはことごとくインドである。

しかし、これらの明らかな事実にたいして、ソ連の指導者は一概に目をつぶって見ようともし

ない。インド反動派が一度ならず武力挑発をおこない、中国の領土を蚕食し、ついには大挙侵犯するにいたるこのことは前後数年の長きにわたっておこなわれたが、かれらは、いまだかつてひとともインドを公然と非難しなかった。ところが中国がやむなく自衛のための反撃に出たとき、かれらは大声でわめきたて、乱暴にも中国を中傷し、中国こそ「戦争手段に訴えてインドとの辺境紛争を解決しようとしている」とあくまで言い張ったのである。かれらがこのようにいったのはどんな根拠があるというのか。

フルシチョフはつぎのようにいっている。「わたくしはなにが戦争であるかということを心得ている。インドで死人がでた以上、これは中国がインドを攻撃したということになる」、と。

これはまったくでたらめきわまるものである。このことは、侵略者の攻撃に直面した場合、ただ攻撃されることだけが許され、反撃することは許されず、もし反撃して相手方の人間を殺せば、侵略される者が侵略者になってしまうということにほかならない。もし良心があるならば、どうしてこういう言葉を口にだせるのか。

フルシチョフは「われわれは、インドが中国と戦争しようとはぜんぜん考えていない」といっている。またソ連の指導者は「インドのように軍事、経済面で中国よりはるかに弱い国が、ほんとうに中国に軍事的攻撃を加え、中国を侵略しようと考えるのは、まったく厳粛さをかくものである」といった。いいかえると、かれらからみれば、中国はインドより強大であるから、中国がインドにたいして軍事的攻撃を加え、侵略をおこなうことだけが可能であるが、この逆はありえないというのである。



こうした論法もまた、でたらめきわまるものである。少しでもマルクス・レーニン主義の常識をもちあわせる人ならば、反動派というものはみな主観主義的であり、力関係と情勢の発展をしばしば見あやまるものだということを知っている。インド反動派もこの法則の支配からまぬがれることができない。かれらは中国が長期にわたってつづけた忍耐と自制を弱体で組みしやすいと見たのである。かれらはまた、あと押しがあるから恐れることはない、帝国主義の後ろだてもあるし、ソ連の指導者の支持もある、自分が手を出しさえすれば、中国を譲歩させて、領土にたいする自分の要求を実現できると考えていた。かれらはまさに、こうしたあやまった分析と予想から出発して、中国にたいする大規模な武力攻撃をおこなったのである。ソ連の指導者はあえてこれらの事実にふれようとせず、でたらめにも国家の強弱をもって、だれが侵略者で、だれが被害者であるかを判断する基準としている。これではどこにマルクス・レーニン主義らしいにおいがしているというのか。

中国の主動的停戦と後退は、全世界の平和を愛好する国家と人民から、熱烈な歓迎と称賛を受

けた。ところが、フルシチョフは口にだせないある種の動機から、かえって中国に背後から一本の矢を放ったのである。かれはつぎのようにいっている。中国が一方的に停戦し、後退したのは、もちろんよいことである。しかし、当時中国軍隊がもとの陣地から前進しなかったなら、もっとよいことではなかったか、と。

この問題は、ひじょうに巧妙に提起されたようにみえる。しかし、われわれは逆に、ソ連の指導者の教えを乞いたい。きみはどうしてネールに、当初かれが攻撃の命令を下さなければ、もっとよかったのではないかと問いかけないのか。もともと攻撃がおこなわれないのに、どこから反撃が加えられるというのか。これは小学生でもわきまえている道理ではないか。

われわれはソ連の指導者にいうことができる。中国の辺境守備隊が自衛のための反撃にさいして不法なマクマホン・ライン以南の中国領土に前進したのは、インド反動派の武力攻撃を徹底的に撃退し、武力によって境界の現状を変えようとしているインド反動派の計画をうち破るためであったのだ。中国の辺境守備隊が主動的に停戦し、後退したのは、武力で境界の現状を変えようとしないわれわれの一貫した立場を貫くためであり、話し合いによる境界問題の解決に条件をつくりだすためであったのである。これはすこしも理解できないようなものではない。事実が証明しているように、われわれがインド反動派に反撃を加えたからこそ、はじめてかれらが多少道理



をわきまえるようになり、中印辺境の情勢も基本的に緩和されてきたのである。

## 三、社会主義国はブルジョア反動派の武力攻撃にたいしてどんな態度をとるべきか？

ブルジョア反動派の武力攻撃に直面して、社会主義国にはただ二つのやり方しかない。一つは自衛であり、他の一つは降伏である。ソ連の指導者の論理によれば、ただ降伏があるだけで、そうしなければ平和共存の原則に違反するのである。また、かれらのこうした観点はレーニン主義的であり、中国がインド反動派の軍事的攻撃にたいし、自衛のための反撃を加えたやり方は非レーニン主義的であり、狭あいな民族主義的態度のあらわれであると、かれらはいうのである。

レーニン主義には、反動派の軍事的攻撃にたいして、自衛のための反撃をおこなってはならないという一ヵ条があるとでもいうのか。それはない。絶対にないのだ。こうした論法は偉大なレーニンにたいする冒とくである。

レーニンが提起した平和共存の原則には、ただ攻撃を受けるべきで、反撃してはならないという一ヵ条があるとでもいうのか。それもない。絶対にないのだ。こうした論法は偉大なレーニンにたいする侮辱である。

平和共存はもともと双方を制約するものであることは、だれでもが知っていることである。双方が平和共存を願い、そしてそれを実行してこそ、はじめて衝突がさけられ、平和共存の局面が維持されるのである。もし一方が一度ならず忍耐しても、他の一方があくまで戦うというならば、衝突はさけられない。これは本来常識の範囲に属する事がらである。中印境界問題についていえば、衝突をさけるために中国はあらゆる努力を重ねてきたのである。武力衝突はインド反動派が故意に中国におしつけたものである。中国が自衛のための反撃をおこなったのち、すみやかに停戦し、後退したのは、まさに話し合いを通じて境界問題の解決をかちとり、平和共存を維持するためである。事実上、ソ連の指導者のいう平和共存は降伏主義である。降伏主義、これはわれわれの政策のなかにはないのだ。

自分のあやまった主張を弁護するために、フルシチョフはつぎのようにのべている。ソ連の四十五年らいの経験が証明しているように、武力に訴えなければ解決できないというような境界紛争はあり得ない、と。

これはソ連の歴史にたいするおおっぴらな歪曲である。

一九二一年、ソ連とトルコのあいだにつぎのような事件があったことをわれわれは覚えている。当時、ソビエト国家がトルコの革命に極力支持を与え、ソ連・トルコ友好条約の話し合いが



進行していたにもかかわらず、大トルコ再現を夢みる計画をもっていたケマル政府は、武力を行使してソビエト国家の領土を侵略、占領し、ソ連・トルコ条約調印後もグルジアの重要な都市バツムを占領さえするにいたったのである。こうした状況のもとで、ソビエト政府は赤軍に自衛のための反撃を命令し、三日間の戦闘によってバツムを奪回したのである。そこではじめてケマル政府の拡張的野心をおさえ、ソビエト国家の辺境の安定を守り、ソ連・トルコの友好関係を維持したのである。

ソ連の指導者におたずねしたい。当時赤軍のとった自衛行動は非レーニン主義的であるとでもいうことができるのか。レーニンの決断は狭あいな民族主義的な態度のあらわれであるとでもいうことができるのか。

もちろんそのようにいうことはできないのだ。それとはまったく逆に、中印境界問題でのフルシチョフの観点は、まさにかれがレーニンの平和共存に関する原則を修正したもっとも顕著なあらわれである。

## 四、中印境界問題を平和的に解決する誠意がないのはだれか？

### それはインドなのか？　それとも中国なのか？

中国は過去において中印境界問題の平和的解決を堅持したばかりでなく、インド反動派の大規模な軍事的攻撃を撃退した後にも、依然として少しも動揺することなくこの方針を堅持している。中国政府は積極的に措置をこうじて、停戦局面を安定させ、双方の武装部隊を接触させないようにし、辺境の情勢を緩和させ、話し合いによって中印境界問題の解決をはかってきた。ところが、インド政府はこれとはまったく逆に、つとめて停戦局面の不安定化をたくらみ、双方の武装部隊が接触を続けることをねらい、ひきつづき緊張情勢をつくりだし、頑固に話し合いを拒否しているのである。この二つの態度は、全世界人民のまえにことの是非を明らかにしている。

しかし、ソ連の指導者は、中国には中印境界問題の平和的解決の誠意がないと、まったく根も葉もない中傷を加え、中国は「アジア・アフリカ諸国人民の意志をあらわした理性のよびかけに耳をかさなかった」と非難した。かれらはまた、「インド政府はコロンボ提案に積極的にこたえ、完全に、なんら留保することなくこれらの提案を受けいれ、かつそれを基礎として、中華人民共和国と話し合いを始めたいという意志を表明したが、中国政府はいまだに友好的な中立諸国の提案を受けいれておらず、この提案を基礎として話し合いをおこないたいとも表明していない……中国政府側はなんら建設的な段取りをとっていない」などといっている。

事実は雄弁に勝る。中国側がいったい何をしてきたかを見ようではないか。



〈第一〉、中国の辺境守備隊は主動的に停戦し、後退した。かれらは自衛のための反撃にさいして進駐した、元来中国に属していた領土から撤去したばかりでなく、一九五九年十一月七日の実際支配線の中国側へ二〇キロの外にまで後退した。

〈第二〉、中国政府は話し合いを再開するふんい気をつくりだすために、捕虜にしたインド軍士官・兵士を全部主動的に釈放、送還し、ろ獲したインド側兵器と作戦物資の大部分を返還した。

〈第三〉、中国政府は、一度ならず中印両国の総理と首相が会談をおこなうよう提案し、そのうえ、インド首相が都合により北京にこられない場合、わが国の総理がふたたびニューデリーにおもむいて、中印境界問題の平和的解決の道を探求する用意があると表明している。われわれは最近また重ねてこの提案をした。

〈第四〉、中国側の大きな努力によって、コロンボ会議諸国が調停にのりだす基礎ができた。このことは、これらの諸国が一致して公認しているところである。中国政府は積極的にコロンボ会議のよびかけと提案にこたえ、みずからの一方的な行動によってコロンボ提案の大部分を実行し、しかも部分的にはコロンボ提案の要求している以上のことをしてきた。たとえば、コロンボ提案は中国が中印境界西部区間で二〇キロ後退することしか要求していないが、中国は中部区間と東部区間でも二〇キロ後退したのである。

第五、コロンボ会議諸国の調停のためにはらった努力にこたえ、中国側は一歩進んでつぎのような措置をとった。すなわち、かつてインドに侵略、占領された実際支配線の中国側地域と停戦の手配中に争議のあったその他の地域をあけて、民政ステーションさえ設立しなかった。

第六、コロンボ提案にたいする中国の態度は誠実なものであり、一貫したものである。中国はコロンボ提案を中印双方が話し合いをはじめる場合の基礎とすることを原則的に受けいれ、個別的な条項にたいする自国の解釈を話し合い開始の先決条件とはしていない。

中国がとったこれら一連の重要な建設的な段取りは、中印話し合いの再開に十分な条件を提供し、コロンボ会議諸国の高い評価と称賛をえている。コロンボ会議にたいする中国の態度が積極的、協力的であり、中国が中印境界問題の平和的解決に誠意をもっており、しかもすでに大きな貢献をしたことを承認しないようなコロンボ会議参加国は一国もないのである。ソ連の『プラウダ』紙は、中国が「なんら建設的な段取りをとっていない」と中傷しているが、これではみえすいたでたらめをいうことになるではないか。

つぎに、インド政府がどんなことをしてきたかを見てみよう。

中国は主動的に停戦したが、インドはひきつづき辺境で挑発をおこなっている。

中国は主動的に後退したが、インドはふたたび前進している。



中国はインドの捕虜を全部釈放、送還したが、インドは華僑を監禁し、迫害している。

中国は両国関係の改善につとめているが、インドはひきつづき反中国ヒステリーをあおりたてている。

中国は無条件で話し合いをおこなうよう主張しているが、インドは先決条件を固持し、話し合いを拒否している。

ソ連の指導者の口にかかると、インドはコロンボ提案に「積極的にこたえ」、中国はなにもしなかったということになるのである。かれらはこのように口から出まかせをいっているが、いったいコロンボ会議を中印両国の直接的な話し合いを促進する会議と見なしているのか、それともインドの肩をもち、中国に反対する会議と見なしているのか。

インド政府は話し合いを拒否する横暴な立場をおおいかくすために、ひとつの看板をかつぎだした。それがいわゆる「コロンボ提案の全面的受けいれ」である。インドのいわゆる「コロンボ提案の全面的受けいれ」とはいったいどういうものであろうか。元来、インドも当初コロンボ提案は明確性を欠いたものであるとし、この提案を原則的に受けいれることを表明しただけであった。そしてコロンボ提案を明確にするための文書がニューデリーでつくられるにいたって、はじめて「コロンボ提案の全面的受けいれ」を表明したのである。このいわゆるニューデリーでの明

確化は中国が事前にまったく知らなかったものである。後日われわれが調べた結果、それが実際はインド政府自身が起草した文書であり、コロンボ提案にたいするインド政府自身の解釈であることが明らかになったのである。それゆえ、インド政府が「コロンボ提案を全面的に受けいれ」なければならないと固持しているのは、実際はコロンボ提案にたいする自己の解釈を中印両国話し合いの先決条件にしようとしているものである。インド政府は、中国がこうした無理な先決条件を受けいれないことを百も承知しているのだ。インド政府がこのように固持するのは、話し合いを妨害するためである。これはコロンボ会議諸国が調停しようとする善意を歪曲する陰謀である。ソ連の『プラウダ』紙はこれを大いにほめたたえているが、これはただ、ソ連の指導者が中印境界問題の解決を望まず、またコロンボ会議諸国の調停の努力が成功するのも望まぬということを証明するだけである。

さらに笑止千万なことには、『プラウダ』紙はインド反動派を援護するため、こともあろうに中国がビルマ、ネパールなどの隣国と話し合いによって境界協定をあいついで結んだ事実をもって、中国が中印境界問題の平和的解決に誠意をもっていない証拠だとさえいっている。『プラウダ』紙の論理はつぎのようなものである。中国はビルマ、ネパールなどの国ぐにと境界問題を平和的に解決したのに、どうしてインドと境界問題を平和的に解決することができないのか。この



点からみて、中国は中印境界問題を平和的に解決する誠意をもっていないといえる、と。これはまったく奇妙きわまる推理である！　およそ論理的な思考能力をもちあわせている人ならだれでも、中国がビルマ、ネパールその他の隣国と境界協定を結んだという事実から、ただつぎのような結論をひきだすだけであろう。もしインド政府が同じように誠意をもっていさえすれば、中印境界問題も中国・ビルマ、中国・ネパール境界問題と同じように、平和的解決をみることができるのだ、と。中印境界問題が解決されないでいるその責任は、中国にはないのである。ところが、ソ連の指導者たちは、こともあろうにこれとまったく相反する結論をひきだしている。アメリカと連合し、インドを支持して、中国に反対する目的を達成するために、ソ連の指導者はもはやもっとも基本的な論理をもかえりみないところまで堕落してしまったのである。

## （三）

中印境界問題でソ連の指導者がとっている立場は、プロレタリア国際主義の原則を裏切っているばかりでなく、中立であるといいうるものでもない。かれらはアメリカ帝国主義とともに、インド反動派が社会主義の中国に反対し、インド人民に反対しているのを援助している。したがって、かれらは社会主義陣営を裏切ったばかりでなく、インド人民をも裏切ったのである。

かれらの立場は、中立を厳守しているアジア、アフリカ諸国とまったく違っている。

〈アジア、アフリカ諸国は事実を重視し、中印双方の見解に根気よく耳をかたむけている。だが、ソ連の指導者は事実をふみにじって、ひたすらインド反動派の言葉に耳をかたむけている。〉

〈アジア、アフリカ諸国は紛争をめぐっての是非を真剣に検討し、かるがるしく判断をくだそうとはしていない。それにひきかえ、ソ連の指導者は独断的な態度をとって、中国が誤りを犯したときめつけている。〉

コロンボ会議に参加したアジア、アフリカ六カ国は、自分たちの任務は調停であって仲裁ではなく、その目的は中印両国の直接の話し合いを促進することであり、中印双方が話し合いにさきだち、コロンボ提案を全面的に受けいれなければならないという必要はない、とくりかえし明らかにしている。それとは反対に、ソ連の指導者は、インド反動派とおなじく、中国に「コロンボ提案を全面的に受けいれ」させ、コロンボ会議参加諸国をインドの肩をもつ立場においこもうとくわだてている。

アジア、アフリカ諸国は、中印境界問題が話し合いを通じて平和的に解決され、中印辺境の情勢が緩和を維持しつづけられるよう心から願っている。さいきん発表されたナセル・アラブ連合共和国大統領とバンダラナイケ・セイロン首相の共同コミュニケは、「アラブ連合共和国とセイロンの友好のかけ橋で結ばれた（中・印）という偉大な二つの国家のあいだの緊迫した関係をとりのぞくよう、コロンボ諸国は努力しつづけるべきである」と表明している。これに反してソ連の指導者は、火のない所に火をつけるというようなことに熱中し、中印辺境の情勢が中国側の一方的な努力によってはやくから緩和されてきている事実をまったく無視して、中印辺境での衝突が「ふたたび先鋭なかたちをとる」であろうと断言している。



事実がこのようにはっきりしているので、ソ連指導者の親友――裏切り者チトー一味でさえ「ソ連政府はそのヒマラヤ山衝突についての分析で、コロンボ諸国よりいっそう先の方へ走っており、中国がこのことにたいして、まず最初に責任を負わなければならないと責めたてている」と認めないわけにはいかなかった。（十月十四日づけのユーゴスラビア『ポリチカ』紙掲載、「コロンボ諸国の新しい行動」より）

これればかりではなく、さいきんインド反動派を支持する面で、ソ連の指導者は、ある時には、アメリカ帝国主義よりももっと力コブをいれるということさえしている。アメリカ帝国主義は、インド反動派がいわゆる中国のインド「侵入」準備という根も葉もないさまざまなデマをデッチあげているのはアメリカにたいしカネをせびるためだと百も承知している。それゆえ、アメリカはこれらのデマにたいして、しばしば成り行きをみる態度と保留の態度をとっている。ところが

ソ連の指導者は、ネール政府のデッチあげたさまざまなデマにたいして、全力をあげて歩調を合わせ、それに呼応している。

中印境界問題で、われわれは一貫して、中印双方の直接の話し合いを推進し、しかも紛争には介入しない友好的なアジア、アフリカ諸国の公正な努力を歓迎し、公正を主張するかれらの意見に耳をかたむけてきた。しかし、ソ連の指導者は裏切り者チトー一味と同じく、完全にインド反動派の側にたっている。それゆえ、中印境界問題でかれらは全然発言権がないのである。

ソ連の指導者は、政治的にインド反動派を極力支持しているばかりか、アメリカ帝国主義に追従して、経済的にも、軍事的にも、インド反動派が中国に反対することを積極的に援助している。

一九五五年から一九六三年四月にかけて、ソ連政府がインドにたいして提供し、あるいは提供を約束した経済援助の総額は五〇億ルピーにのぼっている。そのうちのほとんど全部は、インド反動派が反中国を開始してから提供されたものである。

ソ連の指導者のインドにたいする軍事援助は、一九六〇年にはじまっている。いいかえれば、インド反動派が中国にたいして武力挑発をおこなったあとにはじまっている。

一九六二年十月、インド反動派が中国に大規模な武力攻撃をおこしたあと、ソ連の指導者はイ



ンド援助の進行にいちだんと拍車をかけたものである。昨年十二月十九日、インド鉄鋼・重工業相スブラマニアムは新聞記者に、インドが〈緊急事態〉を宣言していらい、ソ連のインド援助工事の速度はいっそうはやめられているとのべた。

本年七月、中ソ両党会談のあと、ソ連の指導者はインド反動派にたいする軍事援助をいっそう拡大することに同意した。

『プラウダ』紙の論文は、「インドにたいするソ連の援助は、その性格からいって、他の数多くの年若い発展しつつある国ぐにたいするソ連の援助とまったく同じものである」とのべている。

社会主義国が新独立国を援助する目的は、それらの国ぐにが独立した民族経済を発展させ、植民地主義の影響を一掃し、帝国主義の支配からぬけだすのを援助することにあり、決してかれらがある別の社会主義国に反対するのを援助することにあるのではない。〈しかし、新独立国にたいしソ連政府が援助をあたえている動機は疑わしいものがある。インド反動派にたいするソ連政府の援助にいたっては、インド反動派がアメリカ帝国主義に身をまかせ、反中国、反共、反人民の活動をおこなうのをおおっぴらに支持することにほかならない。これは明らかな事実である。

ソ連政府の九月二十一日づけの声明はつぎのようにのべている。「現在、中国の指導者は、イ

ンドがソ連の兵器を使って中国と戦っていると大いに非難している。しかし、第一に、これは実質上、実際の状況に合致していない。第二に、この論理によれば、インド政府はより多くの理由をあげて、つぎのように公言することができるであろう。中国軍隊はソ連の軍用器材を使ってインドと戦っている、なぜなら、ソ連が中国にどんなにばく大な軍事援助を提供したかは周知の事実であるからだ」、と。

自分の責任をたなにあげたり、奇弁を弄したりすることはなんの役にもたたない。第一に、中国の辺境守備隊は自衛のための反撃の過程で、インド軍の使用したソ連製兵器をろ獲した。第二に、われわれはソ連の指導者におたずねしたい。きみたちはいったいなにをやっている人間か。きみたちは兵器商人なのか。もしもきみたちが兵器商人であるなら、きみたちのこの話はまったく正しいのだ。これは片手で金をうけとり、片手で品物をわたす、だれと商売しようと一向さしつかえないというものだ。だが、もしきみたちがいまもなお共産主義者であり、そのうえ社会主義国の指導者であると自認するならば、この話はまったく誤りであり、このうえもなく馬鹿げたものである。共産主義者の立場にたっているならば、どうして社会主義の中国と大ブルジョアジー、大地主支配下のインドとを同列において論ずることができるだろうか。みずからの階級的兄弟を援助することと反動派を援助することとをなんの区別もせずに同一視することができるだ



ろうか。

ソ連の指導者は、ソ連がインドを援助するのは、インドが動揺せずに中立的立場をとりつづけるのを助け、アメリカ帝国主義やその他西側諸国と接近するのをくいとめるためだといっている。

これはみずからを欺き、他人を欺く大うそである。事実はまったく正反対である。ソ連が援助すればするほど、インド反動派は中立的な立場からますます遠ざかり、アメリカ帝国主義といよいよ接近する。

一年らいの事実はどうか、これを見ることにしようではないか。インド政府は、アメリカ帝国主義と軍事条約の性格をおびた軍事援助協定と「防空協定」に調印し、大ぜいのアメリカ軍事要員がインドに進駐し、大量のアメリカ兵器と軍事装備がインドへ流れこんだ。インド政府はまた、アメリカへさらに多くの軍事情報を提供する義務を負い、米・英帝国主義がインドで空軍演習をおこなうことに同意した。一九六三年六月四日、インド大統領ラダクリシュナンは、アメリカ大統領ケネディと共同コミュニケを発表し、公然とつぎのようにのべた。「亜大陸にたいする中国の侵略計画を阻止する一種の共同防衛事業を米・印両国で分担する」ことにアメリカ、インド双方が同意した、と。ここから、偏見を持たない人ならば、だれでもつぎのことを見てとることが

できる。ネール政府はすでにアメリカと事実上の軍事同盟を結び、インドのいわゆる「非同盟」はなんら現実的意義がなく、インドは早くから、一九五七年のモスクワ宣言で述べられているような「反帝の立場に立ち、社会主義国とともに広大な平和地域を形成している」国ではなくなった。現在、ネール政府がすでにボロボロになった「非同盟」の旗をおしたてて、全世界で人をかたり、だますことができるのは、ソ連の指導者がネール政府を支持し、援助しているからにほかならない。こうした支持と援助があってこそ、ネール政府はインド人民の反対をおしきって、なんらはばかるところなくアメリカ帝国主義に身をまかせることができたのである。

事実、ソ連の指導者はインド反動派を支持する面で、アメリカ帝国主義と先をあらそっているばかりでなく、そのうえ、共同出資の会社さえ経営している。九月十九日、ソ連『プラウダ』紙が編集部署名の論文を発表したちょうどそのあと、『インディアン・エクスプレス』紙は手放しで喜び、「アメリカの中国反対以外に、インドはもう一つの強大な国を同盟者にして中国に反対することとなった」、「絞殺用のなわがすでに北京の首にかけられた、われわれはいま二つの強大な同盟国といっしょになって、そのなわをひきしめればよいのだ」と報道した。これはこのうえもなく反動的なうわ言にすぎないとはいえ、米ソ援印・反中国共同出資会社の営業主旨をまる出しにしている。



インド反動派にたいするソ連の援助が増加するにつれて、インド反動派は国内で、人民にたいしますます狂気じみた搾取と弾圧をくわえている。ネール政府は戦争ヒステリーを極力あおりたて、軍備拡張、戦争準備に拍車をかけている。そしてインド人民の基本的権利を公然とはくだつし、なん千人ものインド共産主義者とその他の進歩的人士を投獄している。また、巧妙な名目をつかって重税をとりたて、インド人民を苦しみのどん底にたたきこんでいる。一九六三年六月二十二日のインド週刊誌『ブリッズ』は、インドの億万にのぼる人民の圧倒的多数は餓死線上をさまよっている、インド人民の怒りはすでに極点にたっし、「緩慢ではあるが、激烈な階級的憎しみがつもりつもってきている」ことを認めている。この週刊誌は、「雷鳴はなりひびいている。危機と人心の阻喪は暗雲のようにわれわれの国土の空をおおっている」と恐怖の声をあげている。ネール政府は虚偽にみちた「民主」・「進歩」のかくれみのをまったくかなぐり捨ててしまった。ネール政府のおこなっている政策はまぎれもない反共、反人民の政策である。このような政策は広はんなインド人民の日ましにたかまる反対をひきおこしている。ネール政府にたいするソ連指導者の支持と援助は、その反動的な本質をまったくおおいかくし、人民を弾圧する力を強化する結果になり、ネール政府をさらに手放しでこうした反革命的政策をおしすすめられるようにさせている。

一九六〇年のモスクワ声明が指摘しているように、新独立国の民族ブルジョアジーは二面性をもっており、社会的矛盾が先鋭化するにつれて、ますます国内反動派と帝国主義との妥協にかたむいてきている。新独立国の共産主義者は、ブルジョアジーのなかの反動派が利己的な狭あいな階級的利益を全民族の利益にすりかえようとする陰謀を暴露しなければならない。だが、インド共産党の裏切り者ダンゲ一味は、ネール政府の反動政策をすすんで暴露しないばかりか、かえってインドのプロレタリアートとインド人民を徹底的に裏切り、インドの大ブルジョアジー、大地主の恥ずべき道具になりさがった。ソ連の指導者は裏切り者ダンゲ一味の正体を暴露せずに、逆にインド反動派を援助して真の共産主義者と進歩的人士を迫害し、インド人民の革命運動を圧殺しようとくわだてているダンゲ一味を激励している。

ダンゲ一味

NB!!

対外的に帝国主義に身をまかせ、対内的にインド人民を弾圧しているのは、ほかならぬネール政府である。ネール政府を極力支持し、そのうえ、各方面からネール政府の反動政策を弁護し、美化しているのは、ほかならぬソ連の指導者である。ソ連の指導者はインド人民の革命的事業を裏切った。この罪状の総決算は、やがて明らかにされるであろう。

（四）



中国の主動的な努力により、中印辺境の情勢がすでに緩和したこんにち、ソ連の『プラウダ』紙が突然わざと緊張を装い、「アジアにおける緊張情勢の重大な策源地」というこけおどしの題で、論文を発表した目的は、いったいどこにあるのか。

この論文は、アジアの平和擁護にたいするソ連指導者の関心をあらわしているかどうか。明らかにあらわしていない。アジアには、たしかに緊張した情勢が存在している。アジアの平和は、たしかに脅かされ破壊されている。しかし、これを脅かし、破壊したのは、アメリカをかしらとする帝国主義である。アジアの緊張情勢の策源地は、南朝鮮、台湾、日本、南ベトナム、ラオスなど、アメリカに侵略され、不法に占領されている地域である。とくに南ベトナムでは、いまアメリカ帝国主義は、きわめて非人間的な特殊戦争をおしすすめている。これら緊張情勢の策源地をソ連の指導者は、なぜ見て見ないふりをするのか。これらの地域、とくに南ベトナムとラオスでのアメリカ帝国主義の干渉と侵略活動にたいし、ソ連の指導者は、どういうわけで自らすすみでて、たとえ二ことと、三ことでも正々堂々と抗議することができないのか。ソ連の指導者は、なぜ、すでに緩和している中印辺境の情勢を持ちだして大げさにことをかまえるのか。

うがっていえば、ソ連の指導者が中印境界問題で大いにことをかまえるのは、この問題を利用して、アジア、アフリカ諸国と中国の関係を離間し、アジア、アフリカ人民の反帝闘争のホコ先

アジアの緊張情勢は アメ帝のため

をそらせ、アメリカ帝国主義の侵略と戦争活動をおおいかくすためである。これは、アジア人民と全世界人民の反帝革命事業にたいする裏切りである。

『プラウダ』紙は全力をあげて挑発と離間に熱中し、中国はコロンボ会議参加国のあっせんを拒否し、これら諸国の努力を無視し、さらに「コロンボ会議の資格を疑った」と中傷した。こうした言葉は、つぎのことをはっきり表明している。すなわち、ソ連の指導者は完全にインド反動派の側に立って、社会主義の中国に反対しているばかりでなく、人心を惑わす言葉といろいろな舞台裏の活動を通じて、コロンボ会議参加国がその崇高な平和的調停の使命を放棄し、ソ連の指導者に追従して中印境界問題で反中国の冷戦をおしすすめるようそそのかそうとしているのである。十月五日のインド週刊誌『ブリッズ』は事の真相を暴露してつぎのようにいった。『プラウダ』紙は公然と「中国を非難し、中印境界の緊張情勢の責任を中国になすりつけ」、しかも「ロシアは、中国の説によると境界問題でのインドの立場に批判的であるアジア、アフリカ諸国にたいし、事情を釈明するという仕事を自らすすんでひきうけた」、と。インド週刊誌のいう「釈明の仕事」とはなんであろうか。それは挑発と離間にほかならない。

ソ連の指導者は、インド反動派の中印境界問題にたいする平和的解決の拒否を支持しているばかりでなく、中国がアジア、アフリカ諸国と友好関係を樹立し、発展させること、とくに、アジア諸国と歴史上未解決な紛争を解決することに反対した。『プラウダ』紙の論文とソ連政府の九月二十一日づけ声明は、中国がパキススタンと境界問題を解決し、善隣関係を発展させることにたいして、一度ならず不満をもらし、中国はいわゆる「アジア、アフリカの明らかに反動的な政権」と「感情の調和」をはかっていると悪らつに中傷した。ソ連の指導者の口にかかると、自分が帝国主義の頭目に降伏したことは、世界平和にたいする偉大な貢献になり、中国が隣国と境界問題を平和的に解決したことは逆に一つの罪状としてかぞえられる。そこで、われわれは反対に、ソ連の指導者におたずねしたい。きみたちはインド反動派を支持して、中印辺境で緊張情勢をつくりだしただけではものたりず、さらにまた中国・パキスタン辺境で緊張情勢をつくりだそうとでもしているのか、と。

ソ連の指導者は、各種の国際的大衆組織のなかで、反帝闘争を禁止し、反中国を扇動し、中印境界問題を利用して反帝統一戦線を瓦解させようとしている。中国側は一度ならず誠意をもってつぎのことを指摘してきた。すなわち、団結をまもり、共同して帝国主義にあたるためこれらの組織のなかで、アジア、アフリカ諸国のあいだで論争されている問題をもちだすべきではない、と。しかし、ソ連側は一度ならず、インド代表が中印境界問題を利用して風波をたてるのをそそのかしたり、放任したりした。たとえば、モスクワ世界婦人大会で、ソ連は会議の主催国とし

て、インド代表団が大会のテーマとなんら関係のない中印境界問題をもちだすことを許容し、そのうえ、この会議をあやつって、中国代表団の答弁の権利を剝奪しようとした。この反中国のみにくい芝居は、ソ連側がたんねんに画策し、一手に演出したものであるということは、すべての人が知っている公然の秘密である。またたとえば、アジア、アフリカ人民連帯大会モシ会議でも、インド代表はソ連代表の支持を得て、中印境界問題をむりやりに大会の議題にしようとした。この会議に出席したインド代表団団長は『インディアン・エクスプレス』紙に送った手紙のなかで、このようなみにくい活動の内幕をもらし、「われわれはソ連代表団の十分な支持と協力を得た」とかいている。事情がこのように明らかになっているのに、九月十九日づけの『プラウダ』紙の論文は、こともあろうに、中国が中印境界問題を利用して、各種国際会議のふんい気を「傷つけた」と非難した。かれらにははずかしいという感情がないのだろうか。

目下の中印辺境の情勢についていえば、中国側の主動的な努力により、コロンボ会議参加国の積極的なあっせんにより、それはすでに緩和をみている。インド側がこれ以上挑発しさえしなければ、この緩和した局面は完全に保持することができるであろう。しかし、インド反動派は内政上、外交上の必要から、なんとかして新たな緊張情勢をつくりだそうとはかっている。アメリカ帝国主義は、ひたすら世界が乱れることをのぞんでいる。米英両国が近くインドで空軍演習をお



こなおうとしているのは、中印辺境の情勢がひきつづき緩和していくことをかれらが欲していない一つの証拠である。ソ連の指導者がアジア、アフリカ諸国のあいだで挑発離間をおこない、火のないところに火をつけようとしているのは、これまたかれらが中印辺境の情勢を激化させようとつとめていることを物語っている。アメリカ帝国主義は、中印辺境の情勢を利用してインドを支配しようとしている。ところがソ連の指導者は中印辺境の情勢を利用して中国に打撃を加えようとしている。手段こそちがえ、目的は一つである。それゆえ、アメリカ帝国主義とソ連の指導者に支持されて、インド反動派が中印辺境で新たな衝突をひきおこす可能性は、排除することができないのである。

しかしながら、一九六三年は、なんといおうと一九六二年ではない。現在、コロンボ会議六カ国はすでに平和的調停の責任をひきうけたし、アジア、アフリカ諸国人民と全世界人民は、中印境界問題の是非をますますはっきり理解してきた。また、ネール政府の反動的本質はますます暴露され、アメリカ帝国主義、ソ連の指導者、インド反動派が連合して中国に反対する陰謀はすでになんら秘密ではなくなった。このような状況のもとで、インド反動派があえて新たな衝突をひきおこせば、インド反動派とその支持者は、かならずアジア、アフリカ人民と全世界人民の公正な、きびしい非難を浴びるであろう、とわれわれは信ずる。

われわれは、辺境の情勢がひきつづき緩和していくことをのぞむとともに、将来もできるだけのことをやりぬくであろう。われわれは早くから、コロンボ会議参加国に定期的にインド側の挑発に関係のある状況を通知すると知らせてある。しかも、われわれはすでにこのことを実行しはじめている。もしインド側がかく乱的挑発をやるだけでなく、一九六二年十月二十日以前のように、武力で中国に侵入し、中国の領土を占領すれば、われわれはコロンボ会議参加国にインドが撤退するよう勧告してもらうつもりである。インド側がこのような勧告を拒否し、あくまで中国の領土を侵略、占領するという状況が発生したばあい、われわれははじめて自衛のための反撃をおこなうことを考慮するであろう。

インド反動派がどのような行動をとろうと、またソ連の指導者がどのようにかれらを支持しようと、話し合いを通じて中印境界問題の平和的解決をはかるという、われわれの方針は変わらないであろう。われわれは、世界にどのようなことがおころうと、また、この問題の解決がいつまでひきのばされようと、われわれのこの方針が最後にはかならず勝利する、と信じている。中印両国人民の偉大な友宜は破壊することのできないものである。

ソ連の指導者が中印境界問題でとった立場と政策の全部は、かれらが中国人民を裏切り、ソ連人民を裏切り、社会主義陣営諸国の人民を裏切り、インド人民を裏切り、全世界のすべての被抑



圧人民と被抑圧民族を裏切ったことをあますところなく示している。事実は、ますますはっきりしてきた。すなわち、ソ連指導者の胸中では、アメリカをかしらとする帝国主義と各国反動派は、もはやかれらの敵ではなくなったのだ。かれらの敵はすべてのマルクス・レーニン主義者とすべての革命的人民、とくに中国なのである。

マルクス・レーニン主義を堅持し、一九五七年の宣言と一九六〇年の声明の革命的原則を堅持している中国に反対するため、ソ連の指導者はアメリカ帝国主義者と連合し、裏切り者チトー一味と連合した。現在、かれらはまた、九月十九日づけの『プラウダ』紙編集部署名の論文と九月二十一日づけのソ連政府の声明を通じて、インド反動派と連合することを公然と言明した。世界中のさまざまな妖怪変化どもと声をそろえてののしりさえすれば、中国をののしり倒し、孤立させることができるとかれらは考えているらしい。

われわれはソ連の指導者におすすめする。あまり早く有頂天にならぬように、と。革命的な中国を孤立させることはできない。きみたちが帝国主義、各国反動派と露骨に結託すればするほど、きみたち自身をますます孤立させるだけである。中国をののしり倒すことはできない。その原因はほかでもない、真理が中国側にあるということだ。きみたちの致命的な弱点は、きみたちが事の是非をまったく無視するところにある。全世界の九〇パーセント以上の人は、事の是非を

わきまえている。中国の諺にあるように、理さえあれば、天下をあまねくかけめぐることができるが、もし理がなければ、一歩たりとも歩けない。事の是非を無視するものは、最後にはかならず失敗するものである。

63.12.31



# 付録

## アジアにおける緊張情勢の重大な策源地

（一九六三年九月十九日付ソ連『プラウダ』紙掲載）

核実験禁止条約の調印と世界大多数国家のこの条約への加入は、国際的ふんい気の好転をうながす重要な一歩であった。これは公認された事実であり、世界世論のモスクワ条約にたいする評価であった。ここから各国の人民は、論争のある国際問題が平和裏に、話し合いによって解決できる可能性と現存する世界の緊張情勢の策源地をとりのぞくのに新たな希望をもつようになった。

残念ながら、地球上にはまだ燃え易い材料がのこされており、それがいつどんな時にでも発火して、平和事業にとって重大な危険をまねく原因になるおそれがある。いまでは多少ふるくなったが、依然としてその鋭さを失っていないヒマラヤ山地における中印辺境での衝突は、緊張情勢の策源地のひとつである。

さいきん、中国の新聞は一連の言論を発表した。「中華人民共和国外交部スポークスマンの声明」、中印辺境での衝突に寄せた中国主要新聞の社説、編集部の文章などがそれである。これらの言論の一致した共通点は、どの文章を見ても中国政府の辺境紛争にたいする一切の行動を極力弁解し、他国の政策を極力そしろうとするところにある。これらの言論は、ソ連政府の中印衝突にたいする立場をやっきになってデマをとば

し、中傷している。

中国の指導者は、ソ連が「アメリカ帝国主義と協力し」、「インドとむすんで中国に反対している」と非難するようなでたらめなことまでいっている。かれらは、ソ連政府がインドを「平和地域の重要な地帯」とみなしているといって非難している。こうしてかれらは、平和を愛するアジア、アフリカ諸国は戦争防止のたたかいのなかでの重要な要素であり、社会主義国とともに「広大な平和地域を形成している」という一九五七年の宣言で強調された論点をまったく無視している。中国政府が中印衝突の際にとった行動は、マルクス・レーニン主義政党が共同して定めた平和共存と民族解放運動支持に関する方針に違反するものである。

さきごろひらかれたアジア・アフリカ人民連帯機構常設事務局会議の席上、中国代表はソ連のインドにたいする援助の本質を歪曲して、あたかもソ連が「インドをそそのかして中国と衝突させた」かのようなでたらめをいっている。このようなでたらめな言論がまったく根も葉もないことであることはいうまでもない。このことは理解できることである。なぜなら、このような事実はぜんぜん存在しないからである。中国政府は、インドにたいするソ連の援助が、その性格からいって、他の多くの年若い発展しつつある国ぐにたいするソ連の援助とまったく同じものであることをよく知っているはずである。

中印衝突にたいしてソ連のとっている立場は――たとへそれを中国の指導者がいかに歪曲しようとも――できるだけ早くこの衝突を解決するよう助力することに終始一貫している。ソ連のこの立場を中国の指導者



に諒承、支持してもらうようのぞむのは、きわめて当然なことである。しかしながら不思議なことには、北京はこの立場を極力歪曲している。ソ連の中印辺境での衝突にたいする立場の問題についての中国指導者のさいきんの言論について理解にくるしむことは、ここではいったいどんな要素がより多いか、つまり、最初の社会主義国にたいする恨みか、ソ連政府の一貫してとってきた平和共存政策に極力泥をぬることにあるのか、それともいつわりの言葉にかくれて、全世界の共産党と労働者党が年若い独立国にたいする社会主義国の政策という問題について、一致してとりきめた路線に自分がそむいている事実をおおいかくそうとするところにあるのか、そのどちらかということである。

周知のように、数百年らい、インドと中国の二つの隣国の人民はずっと平和裏に友好的に暮らしてきた。かれらは互いに戦争をしたこともなく、領土問題で戦争をひきおこしたこともなかった。

一九四七年にインド人民が独立をかちとり、一九四九年に中国革命が勝利したのち、インドと中国の両国間では友好的な善隣関係がうちたてられた。両国間の境界は以前のままではあったが、いかなる辺境衝突もおこらなかった。一九五四年、中華人民共和国政府とインド共和国政府は有名な平和共存五原則――「パンチャシラ」に調印した。

かれらはアジア、アフリカのその他の平和愛好諸国とともに、バンドン会議の席上この偉大な思想を守ることをおごそかに確認しあった。

印中辺境での最初の武力衝突は一九五九年の中頃にはじまったのである。そして昨年の秋になると、ひじょうに先鋭化した。中国とインドの間で大兵団の参加する戦闘がまじえられ、いく千もの死傷者と捕虜をだした。

ヒマラヤ山地における衝突は平和を愛する世論に大きな不安をもたらした。ソ連人民、その他の社会主義国の人民は、この報道をひじょうに心配した。タス通信は、ソ連政府の見解をのべた一九五九年九月十日づけのその周知の声明のなかで、この衝突はアジアと全世界の平和の運命に危険な結果をまねくであろうと指摘した。声明はこうのべている。「緊張した国際情勢の緩和をのぞまず、その先鋭化をのぞむ勢力がこの事件につけこんで私利をむさぼるのを中華人民共和国政府とインド共和国政府がゆるさないということをソ連の指導者は確信する。これらの勢力は国と国とのあいだにあらわれた緊張関係の緩和を極力さまたげるものである」と。これは過去においても現在においても、この問題を解決する唯一の正しい路線であり、すべての平和愛好諸国によって支持された路線である。そのこ、ソ連政府は、ヒマラヤ山地での緊張した情勢に終止符をうち、相互がうけいれられる条件で衝突を解決するよう一度ならずよびかけてきた。ソ連は過去も現在も、この種の衝突は国際間の緊張情勢の策源地をそのまま保とうとする帝国主義と反動勢力にとってのみ有利であるという見方をとっている。

しかしながら、中国の指導者は平和を愛するソ連の立場に不満である。たぶん、かれらはインドとの辺境での紛争を戦争手段によって解決し、このことでソ連の支持を得ようとのぞんでいるのかもしれない。もし北京の指導者がこうのぞんでいるのなら、ソ連の立場にたいして「立腹する」理由はもちろんある。しかし北京がどういおうとも、レーニンの平和政策にあくまで忠実であるソ連政府は、国際間における緊張情勢の火をつよめるのではなく、それを消しとめ、だんことして平和を守りかためるために、過去もつねに力をつくしてきたし、将来もそうするであろう。われわれは過去も現在も、印中両国間で辺境での衝突をおこす理由がまったくなく、この種の衝突を武力衝突にまでもっていくような理由はなおさらないと考えるものである。



ヒマラヤ山地における辺境での衝突は、アジア、アフリカの年若い国ぐにに大きな不安をまきおこした。かれらは自分たちの経験から、年若い独立国の団結の弱体化、かれらの間の論争と紛争は帝国主義者と植民地主義者にとってのみ有利であることをよく知っている。一九六二年の秋、印中辺境での大規模な武力衝突が最高潮に達した時、ナセル・アラブ連合共和国大統領、ベンベラ・アルジェリア政府首脳、ブルギバ・チュニジア大統領、シェルマルケ・ソマリア共和国首相およびその他の多くのアジア、アフリカ諸国の著名な活動家たちは、中華人民共和国とインドに、流血をやめて、話し合いによって、平和的に論争を解決するようよびかけた。

中国側のイニシアティブによって去年の十月、印中辺境で戦闘が停止されたあと、すべての善良な人たち

は、衝突が早急に解決され、印中関係における悲劇的なページが永遠に閉じられるようのぞんだ。特に強くそう望む理由は、中国政府がすでにその他の隣国との未解決の領土問題に解決策をみつけだしたからであった。ネパール、ビルマとすでに境界協定がむすばれたし、ましてや、周恩来総理が指摘したように、「中国とビルマの境界問題は、中印境界問題よりはるかに複雑である」からである。

中国政府はパキスタンとの関係を解決するために一連の措置をとった。周知のように、パキスタンは西側諸国のつくった軍事政治ブロックすなわち東南アジア条約機構と中央条約機構に加盟している。

中国の指導者はその談話のなかで、あたかもアジア、アフリカ諸国の人民がインド政府の辺境衝突にたいする立場を「鼻先で嘲り笑っている」かのようにいっている。しかしながら、中国の指導者は、これらの国々にのなかには中国政府の辺境衝突にたいする態度に疑問を持つ国もあれば、また公然とこの種の立場を非難する国もあるということには一言もふれない。世界のこの地域の人民は中印辺境でひきおこされた情勢にたいして不安を感じており、かれらは、もし話し合いの席上で辺境についての論争を解決しようという誠意と願望があるものなら、印中辺境における平和と安寧はとっくの昔に達せられただろうとみている。だが、この希望はいまだ実現されていない。

周知のように、去年の十二月、シリマボ・バンダラナイケ・セイロン首相のイニシアティブによって、六つの非同盟国（セイロン、アラブ連合共和国、ガーナ、ビルマ、インドネシア、カンボジア）の指導者たち



は、コロンボ会議で衝突の平和的解決を主旨とした提案を作成した。会議の参加者は、かれらによって作成された、「停戦強化に役立つ提案が実施されれば、両国代表者間の話し合いのために道をきりひらくことになろう」という希望を表明した。注目すべきことは、中国政府が衝突の罪を全部インド政府になすりつけようとしたにもかかわらず、コロンボ会議に参加したアジア、アフリカの非同盟諸国は、中国政府が自分の軍隊を一九六二年秋の大規模な軍事行動の結果進出した線から二〇キロ後退するようよびかける必要があると考えていることである。

コロンボ会議の提案は、ほかでもなく双方によってうけいれられる辺境論争の解決策を真剣にさがしもとめるために力をつくそうとする各国の友好的な願いにほかならない。

残念ながら北京は、アジア、アフリカ諸国人民の意志をあらわした理性のよびかけに耳をかさなかった。一体これはどうしたことだろうか。一体なにものが衝突の平和的解決の障害になっているのだろうか。

うたがいもなく、もしも双方が話し合いの机をかこんで、おだやかに冷静に、先入観にとらわれずに相互の要求を審議しあうなら、衝突はもうとっくの昔に解決されていたであろうし、世界のこの地域における緊張情勢の策源地は永久にとりのぞかれていただろう。ところが、多くの国の新聞はつぎの事実に注目している、すなわちインド政府がコロンボ会議の提案に積極的にこたえ、完全に、なんら留保するところなく、これらの提案を受けいれ、かつそれを基礎として、中華人民共和国と話し合いを始めたいという意志を表明し

だが、中国政府はいまだに友好的な中立諸国の提案を受けいれておらず、この提案を基礎として話し合いをおこないたいとも表明していない、という事実である。中国政府は、自分のやれることはただ「原則上」これらの提案に同意する旨を声明することだけだと考えている。中国政府側はなんら建設的な段取りをとっていない。

アジア、アフリカ諸国は、中国政府じしん一九六二年の十月と十一月の二度にわたってアジア、アフリカ諸国に「イニシアティブをとって」、インドと中国が直接会談をおこなうよう「協力」してほしいとよびかけた事実を知っている。ところが、これらの国がこの種の「協力」を提供した時、中国政府はかれらの斡旋を利用しなかった。

多くのアジア、アフリカ諸国の新聞は、中国政府が最初「原則上」コロンボ会議の提案を受けいれると言明したことに注目している。だが、すぐそのあとで、この提案を完全に受けいれることはできないと声明し、なぜなら「十分はっきりしていない」からだといい、それについて説明を要求した。しかしこの説明がなされた時、中国政府は、この説明はコロンボ会議に参加した一部の国の代表によってなされたものにすぎず、『人民日報』は、それは「会議の正式文書ではない」といった。中国の新聞紙上にはまた、コロンボ会議の資格をうたがうような論調があらわれた。

中国政府は八月二十日づけの声明のなかで、「原則上コロンボ会議の提案を受けいれる」用意があること



をふたたび言明した。しかし、それは通り一遍の言明のわくをこえてはいない。

現在多くの人たちは、中国政府は極力非同盟国のイニシアティブを賞賛し、かれらの斡旋を「重視し」、「それ相応の評価」をあたえるといいながら、実際はかれらの努力を無視し、コロンボ提案を利用しようともしていない、といいだしているが、これはもっともなことである。

アジア、アフリカ諸国の大衆は、中国指導者の辺境問題にたいする政策をもっと広はんな国際関係におけるかれらの立場とむすびつけて考え、そこから自分の結論をひきだしている。たとえば、ナイジェリアの新聞『西アフリカ・パイロット』紙はこうかいている。北京は「平和共存を信じない、われわれがこの点を早く理解すればするだけ全世界にとって有利である」、と。

中印辺境での衝突は、民族解放の獲得、帝国主義と植民地主義反対、平和のためにたたかう人民の一致団結した事業に大きな損害をあたえている。これにたいしてアジア、アフリカ諸国の人民は大きな不安をおぼえている。かれらは、インドとその他のアジア、アフリカ諸国との関係を離間しようとする意図が中国政府の政策のなかにつらぬかれていることをみとめないわけにはいかない。

注目すべきことは、さいきん中国の指導者は、ネール政府が帝国主義的、拡張主義的政府だといい、また、ネール政府があたかも大ブリテン王国よりも大きな面積をもつ大帝国をうちたてようとしているなどとわめいていることである。こうした論調からみて、インドとの辺境紛争の平和的解決に努める誠意があると

いった中国の指導者の保証は信じがたいものである。

人びとは、北京では当面の衝突がいったいだれに有利であるかを考えようとしないという印象をうけている。この衝突はすでに各国人民に大きな損害をあたえており、これから先もひきつづきあたえていくだろう。周知のように、帝国主義者はすぐさま中印紛争を利用して、ヒマラヤ山地での戦火をあおりたてようとしている。かれらはこの事件をもっと根深い目的をもった計画とむすびつけ、ぞくぞくとインドに武器をわくりこみ、連合して軍事的措置までとるにいたった。帝国主義者がとくによろこぶのは、衝突の一方が社会主義国であるということである。かれらはこの事実を利用して、社会制度の異なる国ぐにの平和共存の思想、社会主義国と年若いアジア、アフリカの独立国の友好と協力の関係をそしろうとしている。その背後には、この衝突を利用して危険な緊張情勢の策源地を維持しておこうとする意図がかくされている。

実際上、中印衝突はすでにどういう結果を生みだしたか、それはまた今後どんな結果をもたらすだろうか。

この衝突は、アジア、アフリカ諸国の帝国主義反対、植民地主義反対の共同闘争における一致した団結に相当大きい損害をあたえた。それはまた、解放された年若い国と社会主義国、とくにインドと中国の団結、協力に多大な損害をあたえた。

中国とインドは軍事衝突によって、まったく意味のない大きい犠牲をはらっている。先祖代々平和と友好



裏に暮らしてきたこの両国の辺境についての論争は、むかしからの強固だった善隣関係を決裂へみちびいていったばかりでなく、経済的にも重大な結果をまねいている。この点、ここ数年らいインドの軍需費がほとんど四倍にふえ、勤労大衆の大きい負担になり、種々雑多な課税も増加して来ている事実を指摘するだけで十分理解できるだろう。

インドの反動勢力は、衝突を利用して排外主義扇動に狂奔し、国内の進歩勢力を攻撃し、インドを中立の道からそらせ、西側の軍事政治ブロックにひきいれようとしている。反動政党の「スワタントラ党」、「インド人民同盟」、いわゆる人民社会党の指導者および与党である国民会議派のなかの極端な民族主義分子は、各種の大衆集会や会合で、また、新聞紙上や議会でやっきになって排外主義的反中国宣伝をおこない、中国との衝突の平和的解決にみちびく可能性のある会談に反対し、中華人民共和国にたいして強硬政策にでるよう要求している。国内ではすでに緊急事態が宣言され、人民の民主的権利はよわめられた。いく百人もの共産主義者と労働組合幹部が逮捕され、投獄された。インドの反動分子は経済発展計画を縮小し、国内の限られた資源を軍事的目的とぼう大な軍事機構の設立に用いるよう要求している。

中国外交部はさいきんの声明のなかで、インド国民会議派の候補者が今年五月のインド国会への補欠選挙で失敗したことにたいして満足の意を表明している。しかし、中国外交部は極端な反動分子クリパラニとマサニが選挙のなかで優位を占めたことには一言もふれようとしない。実際上、中国の指導者はこれらの反動

分子の選挙での成功をインドにおける民主主義の勝利のようにえがきあげている。

中国の指導者が情勢を理解しようとしないことは、インド国会内でおこった事件にたいするかれらの評価の面にもあらわれている。たとえば、『人民日報』は、インド国会のネール政府にたいする不信任案の審議についてかくしきれぬよろこびをもってかいている。しかし、この新聞は不信任案の提出者があいかわらずインドの内外政策を反動的で、帝国主義に近づこうとしているインドの極右集団であるということには、すこしも関心を示していない。いったい北京はどういう意図から、実際にはこうした連中の活動を支持しているのかという疑問を人びとが持つのはきわめて当然なことである。

辺境での衝突が両国にあたえた損害は算出することができる。それはルピーと元（訳註――中国の貨幣の単位）で計算することができる。しかし、どんな方法で中印両国人民の友好と協力事業にあたえた道義的、政治的損害を計算できるだろうか。このような損害はどんな金銭をもってしても、計算できるものではない。印中衝突の期間、民族主義と排外主義の毒菌は、酵母のなかにいるようにうごきだし、繁殖しだした。インドでは反中国感情がひろまり、中国では反インド感情がひろまった。目下の情勢は、客観的にみても両国間の相互敵視をいっそう深めている。

さいきん、事態はつぎのような度合いにまで発展した。それは、この衝突が国際集会のふんい気を悪化させるために利用されてきたことである。モシでひらかれたアジア・アフリカ連帯会議がそうであったし、モ



スクワの世界婦人大会もそうであった。この大会では中国の婦人代表団は大会がこの問題を討議するよう迫った。

これらのすべての事実は、印中辺境での衝突がどれほど重大な結果をまねいたかを如実にものがたっている。このことでとくに不安になるのは、衝突の解決を第一とした実際的な努力がなにもはらわれていないばかりか、かえって多くの証拠は、衝突がふたたび先鋭な形をとるのではないかというおそれさえある。

中印辺境でつづけられている緊張情勢は重大な結果をはらんでいる。銃を手にしたふたりの隣国の兵士が向かいあうとき、とくに、もしかれらの間でかつて激烈な戦闘がまじえられた場合、偶然の一発から流血をひきおこすというような脅威が存在するのはきわめて自然なことである。

平和と各国人民間の友宜を真に願う者は、衝突解決のカギをにぎっている者が表面的な威信についての考慮をのりこえて、話し合いの机をかこんで、互いにうけいれられる衝突の解決策をさがしあてるよう期待する権利を持っている。中印紛争の平和的解決は、印中両国人民のために有利であり、この緊張情勢の重大な策源地をとりのぞくことができ、アジアと世界の平和事業のために寄与することとなろう。

世界のこの地区の緊張情勢をそのままにしておくことを弁解できるような筋のとおった理由はひとつとして存在しない。中印衝突をとりのぞくことは、東南アジア及び全世界の平和をつよめて、インドと中国の人民が力を自分たちの直面している経済発展問題の解決に集中できる可能性をあたえるであろう。

ソ連人は、アジアでもっとも大きい中華人民共和国とインド共和国の二つの国の間で善隣関係が回復されることをのぞんでいる。辺境紛争問題では、われわれはレーニン主義の観点を堅持し、いかなる紛争問題も平和裏に、話し合いによって流血せずに解決できないようなものはない。ほかならぬこうした立場から、ソ連人は中印辺境事件を評価しているのである。ソ連は自分と国境を接する国ぐにを尊重している。われわれは、国と国との間で形成された境界を尊重してはじめて善隣関係が可能であることを知っている。

フルシチョフ・ソ連閣僚会議議長はきわめて明確にソ連人民全体の見解を明らかにした。かれは去年十二月のソ連最高ソビエト会議の席上、中国政府とインド政府が「相互間の利益を考え、中印人民間の伝統的な友宜にもとづいて、すでに生じた誤解をとくよう」希望する旨表明した。ソ連の立場は、ソ連政府とソ連共産党レーニン主義中央委員会のとってきた平和を守り、各国人民間の友宜を強めることを第一とする一貫した誠実な政策である。どんなに複雑な会談も戦争よりはましであり、武力手段ではなく平和的手段に訴え、話し合いの机をかこんで論争問題を解決すべきである。ソ連人民は、印中辺境での衝突の平和的解決策をさがしもとめるようだんこ主張し、できるだけ早い期間に世界のこの地区での重大な緊張情勢の策源地をとりのぞくよう主張する。

63.12.31

ソ連共産党指導部がインドと
連合して中国に反対している真相

1963年12月　初版発行　　定価 30 円

出版者　外文出版社
（北京阜成門外百万莊）

発行者　中国国際書店
（北京 P. O. B. 399）

編号：（日）3050—799　　3—J—583P
00040

▲ ソ連共産党指導部とわれわれとの意見の相違の由来と発展

ソ連共産党中央委員会の公開書簡を評す

B 6 判　86ページ　定価40円

▲ スターリン問題について

ソ連共産党中央委員会の公開書簡を評す（二）

B 6 判　34ページ　定価20円

▲ ユーゴスラビアは社会主義国か

ソ連共産党中央委員会の公開書簡を評す（三）

B 6 判　62ページ　定価30円

▲ 新植民地主義の弁護士

ソ連共産党中央委員会の公開書簡を評す（四）

B 6 判　50ページ　定価20円

出版者　北京　外文出版社
発行者　北京　中国国際書店